
ロボット製作者の誤算

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボット製作者の誤算

【Nコード】

N3227Z

【作者名】

うりぼう

【あらすじ】

ロボでないロボットもの。

中編予定です。

1 最終面接

最終面接官、これが今日、桜井さくらいに与えられた任務である。

自分の作品に乗るパイロットを決めるそれは、技術者たる桜井にとつても重要なことであった。

徹夜明け、カフェイン漬けの頭を揺り起こし、並べられた椅子に座る。

端末の画面には面接者のプロフィールが入っている。どれも、いかつい称号のついた猛者もさたちばかりだ。

人型軍事兵器のパイロットなるものの応募であれば、そんなものだろう。

西暦が二十二世紀になったころ、困ったことに侵略者というものがあらわれた。

よくある話で、宇宙からやってきた未知の生命体というやつである。侵略者しやうりやくというのは、正確にはどうであろうか。

少なくとも、桜井が思う人類とは思えないものが襲い掛かってきたわけで、まるで二十世紀末に流行したロボットアニメの敵キャラのような生き物だった。

世界中で十八体、それぞれ人口密度の極端に高い地域を狙い、降りてきた。

その中に、日本も含まれる。

富士の樹海に降り立ち、一発の砲撃を首都に向かって放った。

その日から、数百年ぶりに首都は京都に戻ることとなった。

残念なことに、人類の危機に救世主といわれるものは現れなかった。謎の正義の味方も、宇宙警察も、政府が隠匿してきた秘密機関もなかった。

唯一にして最大の救いとしては、敵が斥候部隊であり、最初の襲撃をのぞき、人類に戦闘をけしかけることはなかったということだ。なにをするわけでもなく、ただ、そこにいる。人類をひたすら監視しているようだ。

それから二十数年、世界中の紛争が終わりをづけ、かわりに地球軍になるともわかりやすい名称の軍事組織ができあがった。

しかしながら、元々、仲良しというわけでない国々も交えた軍勢である。一枚岩というわけではない。

最初の数年であらゆる攻撃をしかけたが、侵略者どもにはほとんどダメージを与えられず、むしろ返り討ちにあつた。核を使った国もだが、無駄に地球を汚染しただけでなく、侵略者が妙な形に進化していったのを見て、周りは後に続くことはなかった。

なので、地球軍は少なくとも二つの岩に分かれている。手出しをしなければ、とりあえず問題はないだろうというハト派。いや、いつ攻撃してくるかわかならない、さっさと倒してしまえというタカ派。

桜井の所属するのは、どちらかといえばタカ派に属する。人型軍事兵器、すなわちロボットを開発するチームなのだから。

タカ派の国々は、それぞれ新しい兵器を作ることに余念がない。そのなかで、平和ボケした国が、ロボットを作って侵略者を倒すぞ、というのだから、笑いものになったことはいうまでもない。

まあ、そういうお国柄なので仕方ない。

しかし、周りの反応に対し、桜井の組する開発チームは至極真面目に取り組んでいた。桜井もまたそのひとりである。

彼らは皆、ひとつの情念に突き動かされていた。

明確な目的を持つ人間ほど、強い生き物はいない。

彼らが望むのは、人類の平和ではなかった。

彼らが望むのは、死んだ人間の復讐ではなかった。

あるのは、税金で巨大ロボットが作れるという、ただそれだけだった。

天才科学者の集まり、聞こえはいいようだが、つまりは趣味を極めたロボオタ集団である。

ほぼ完成したロボット、それに乗るパイロット、それもまた、桜井にとって重要な要素である。

自分の作品に乗るのだから、やはりそれにふさわしい役者が必要だ。研究室にこもりきりの男が、こうして面接官となっているのもその理由だ。

ロボットにふさわしいパイロットを、ただそれだけだ。

難しいといわれる桜井の思考だが、根幹は実に単純だったりする。

面接者が二十人をこえたところで、桜井は明らかに落胆の色をのせていた。椅子の上に体操座りになり、くるくると回る。

周りの人間は何も言わない、そういう人間だと理解している。

ただ、助手の里中さとなか女史だけは、あわあわとこちらを見てはやめてくださいと口をぱくぱくさせている。

わかっていると、姿勢を戻すと次の面接者が現れた。

桜井の顔がみるみると変わる。

今までの面接者とは違う、なんというかオーラ、纏う空気が違うのだ。

入ってきたのは、赤い髪をつんつんに立てた十代の若者だった。

髪の毛のはねとセットに、力強い眉が意思の強さを示している。元氣と勇気を無駄に秘めた力強い目に、屈託のない笑みを浮かべる口、やんちゃをそのまま表したかのように、頬には絆創膏を貼っていた。

まだ高等教育の過程だろう、他の面接者がスーツであるのに対し、学生服を着ている。

対象年齢を十八歳からにしているので、学生が来ても問題はないはずだ。しかし、来るのは大体二十代後半から。せつかく、制限年齢を三十歳までにしているのに、どれもこれも無駄に堅くて老けた野郎ばかりだった。

まあ、若いものも受けていたのかもしれないが、最終面接までに落とされたのだろう。

しかし、若者は他の面接者の格式ばった堅い口調でなく、どこか間違った敬語を使う。その中に、夢や希望といった現代の若者にかけた熱い情念がうかがえる。

制服の裾から出た手足には、無数の傷が見えていた。修行の結果です、と至極真面目に言ってくれる愛すべき馬鹿だ。馬鹿なのに、ここまで残ってこれたということは、身体能力、筆記ともに悪くないはずだ。素敵な馬鹿だ。

桜井は端末のプロフィールにチェックを入れる。

あまりに理想、絵に描いたようなロボット操縦者だ。

桜井の眼鏡の奥の熱い思いは、レンズをこえて他のものにも見えたりらしい。

面接を終えた後で、同じ技術者の澤田さわたがやりと笑う。カレーが似合いそうなふくよかな中年は、こう見えて人工筋肉の権威である。

「やったな。ようやく、気に入りそうなのが来て」

「ああ。ただ、気になることがひとつある」

なにが気に食わないんだ、と澤田が首を傾げる。

素養としては問題ないのだが、たった一つだけどうしようもないところが気になるわけで。

「……てくれないかな」

聞き取りづらい言葉を澤田は耳を近づけて、聞き取るうとする。

反すつするように桜井がもう一度つぶやいた言葉に、澤田は身を引

いた。

「性転換してくれないかな」

パイロットとして素晴らしい素養を持つ若者、その胸部は平均のそれより肥大し、制服の裾からのぞく大腿は、見るものによっては垂涎ぜんの代物である。

『飯田睦美』、十八歳。

染色体はホモ型。つまり、女性である。

2 誤算

ロボットを作るといっても、理想と同じものを作ることなどできない。

その点、桜井も重々承知している。

まず、気になったのは駆動式についてだ。

ロボはロボらしく、機械的であつてこそ美德である。その昔、自動車や列車が変形し、ロボットになるという代物があつたのだが、それを踏まえるとカルダン駆動方式が理想的だと桜井は思う。

だが、採用されたのは澤田のすすめた人工筋肉だった。

すでにパワースーツや小型ロボットで使われているそれが採用されるのは、理性としては納得できる。

カルダン駆動方式だと、やはり機械的になりすぎる点も否めない。理性としてはわかつている。

8

同志と思われがちな桜井と澤田であるが、実は一線を引くところがある。

桜井は二十世紀後半におけるより機械的なロボット、澤田はそのあとに生まれた生物的フォルムを有したロボットを愛している。

同じロボオタといっても引けないところだ。

それでは合体できないじゃないか、といえば、カルダン駆動方式もかわらんだろ、といわれた。

工夫すればできないこともないのだろうが、せいぜい接続箇所が数か所である。二体までなら合体可能だが、三体目ともなると難しい。

インフレのごとく強くなるロボット、それは泡と消える。

もちろん、合体の件は、議会で却下になるだろうが、だからとて夢は最後まであきらめるものではない。

人工筋肉が採用されたことで調子にのった澤田は、ロボットの外装もまた生物的にしようともくろんでいたが、それは許されなかった。いい気味である。

外装は重金属、それは譲れない。

と、言いたいところだが、ここにも待ったがかかる。

重金属は重い。

燃費が悪く、関節や人工筋線維ナノチューブの摩耗が激しくなるという。

では、代替になにを使う気だ、と詰め寄ったところ渡されたのは、軽くて堅いおなじみのものだった。

プラスチックである。

いや、正確には可塑性物質というわけではなく、大義の意味でのプラスチック。ここでは、植物由来の高分子物質とっておく。

材料はとうもろこしである。

エコである。土に戻せば数か月で分解されるそうだ。

また、耐熱性、耐水性にすぐれ、メンテナンスさえ行えば、金属よりもかなり使い勝手のよい素材らしい。

家畜のえさでロボを作る気か、ロボにエコを求めるな、とお偉いさに殴りかかりそうになるのを、助手の里中さとなかにはがいじめにされる。

ああ、丁寧に説明をくわえると、桜井は女性ひとりに取り押さえられるほどのもやしである。

あまりの桜井の暴れっぷりに、お偉いさんは「わかった、どうにかしよう」といってその場は事なきを得たが、のちに材料がとうもろこしから米に変わるだけだった。

だからなんだというのだ。

ちなみに、国産にこだわる別の技術者が、使用される米に外国産が混じっていたことに腹をたて、原材料は国産ひとめぼれ百パーセントになったというのはどうでもいい話である。

なんでそこは受け入れられるんだ。

装甲に使われる素材は、やたら長い横文字だったが、原材料と形状から『せんべい』としか誰も呼ばない。

ああ、せんべいだ。他になんという。

他にも、ロケットパンチは却下され、大きさもスーパーロボットではなくリアルロボットサイズ。外装のデザインは赤と金を基調としたかったのに、樹海に行くのに派手すぎると、迷彩色。地味すぎる。

そんなわけで、桜井の意見が真つ当に通ったのは、ロボットを遠隔操作式でなくパイロット式にしたことくらいだ。

つくくわえていうならば、三十歳未満という年齢制限付き。本当ならば、二十歳以下としたかったが、贅沢は言えない。

桜井の担当は、ロボットの操作系にあたる。

人間のようには二足歩行を行うというのは、簡単なようで高度な行為

だ。すでに二足歩行型の小型ロボットは一世紀以上昔に作られていたが、それをより大型化し、より人間的に動かすのは課題が残るものであった。

桜井は脳波とロボ操作を直結する方式をとった。正直、気に食わない方式であるが、より確実にロボ作りに取り組むには仕方ないことだった。あとで、形だけのコックピットを作り上げればいいことがあるし。

しかし、これの原型となるシステムを作ったのは、桜井の祖父であり、そのブラックボックス部分を知っているのは桜井ひとりのみであることが役に立つ。

「これはより感受性豊かな、つまり多感な若者ほど大きく作用するシステムだ」

と、でつちあげた。

理由は、ロボにおっさんが乗ってもおもしろくない。それだけだ。いや、おっさんが悪いとは言わない。むしろ、好敵手には必要な素材である。しかし、主人公格の機体にのるのは、無駄に熱血した青少年であるべきだという持論がある。これは譲れない。

というわけで、ロボ自体が気に入らない仕上がりにできたところで、一縷の望みをかけて最終面接を行ったわけだったが。

飯田睦実^{いいただむつみ}。

あまりに理想的過ぎて、たったひとつのことが許せない。そういうこともある。

「俺のY染色体なら、いくらでもあげるのに」
「な、なんですか。セクハラですよ」

隣でココアを飲む里中女史が、なにか勘違いしている。
そういう意味ではない。

いや、そういう意味ではないので、髪を指に巻きながらもじもじしないでほしい。上目使いでこちらを見るな。

顔を赤らめる天然女を無視し、桜井は飲み終えた紙コップを再生マ
ークの入ったごみ箱に捨てる。

面接の結果、採用者は十名。

これから一年間、正規パイロットになるための訓練を受ける。

その中に飯田睦実も含まれる。含ませた。ああ、ごり押しだ。
桜井の推した人物は、飯田を含めて三人しかいなかったので簡単に
ことはすんだ。

ちなみに、残りふたりは、クールな長髪美形タイプとややずんぐり
した三枚目タイプである。二号機、三号機も視野にいれなければな
らない。

高等学校の卒業と合わせて、こちらの研究所に配属になる。

それまでに桜井のすることは。

ネットで美容整形外科を探すことだった。

タイやモロッコへ行く必要など、前世紀の話で、今は国内でもけっこう安価にやってくれる。もちろん、費用をけちるつもりはないし、変なところを紹介するつもりもない。

知り合いの外科医に話を聞いてみるのもいいかもしれない。

大切なパイロットである、無下にしたくない。

3 操作

三月になり、パイロット候補生たちが研究所にやってきた。基本、研究所内に隣接する寮に住むことになる。

独身の研究員は同じく寮に住むものが多い。

桜井さくらいも独身者のひとりだが、通勤圏内に持家があるためそこに住んでいる。

もつとも、徹夜で仕事をすることも多いので、研究室内に簡易ベッドと着替えを置いているが。

候補生たちが入ってきたことで、ここ最近はずっと研究所で寝泊りが続いていた。

二週間ぶりに家に帰ると、たおやかな笑顔で祖母が迎えてくれた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

身内びいきといわれるだろうが、理想的な年齢のとりかたをしていると、桜井は思う。

現代では珍しい平屋の日本家屋に、竹ぼうきで玄関を掃く和服の老婆。

そこだけ、二十世紀半ばにタイムスリップしたかのような光景である。

これも祖父の残した特許の恩恵による。でなければ、箱物マシヨウに住む人口が九割をこえるこの時代で、小さいながらも庭を持つことなどできない。

脳波を読み取り、直接、端末に働きかけるシステムは、現在さまざま

まな分野に利用されている。

特許期間はとうに終えたが、祖母の生きているあいだくらいは、固定資産税を払うことはできる。

両親はさっさと売ってしまったって自分たちのマンションに移り住んで来いというがそれはありえない。

祖父が死ぬ前に遺言書で書いてくれた。所有権は桜井にうつっている。

「荷物、届いていたから置いといたからね」

荷物はロボット模型に囲まれた中に置いてあった。いうまでもなく、桜井の部屋であり、大量の模型は祖父から受け継いだものも多い。祖父がこの家をくれたのも、コレクションを守るためだということがわかる。

箱の中身は、桜井が先日ネットで注文していたものだ。

仮想空間を使えば、研究所内でもいくらでも買える。脳に情報をフィードバックすることで、試着や試食も可能である。

「どつやっつて、渡そうか」

腕を組んで、考えあぐねていると。味噌汁のおいがした。祖母のことだ、ほうれん草のおひたしと、肉じゃがも急いで作っていることだろう。

軍用レーションとタブレット以外の食事は久しぶりだ。

研究所に戻ると、朝から候補生たちがランニングを行っていた。

操作系が脳波を読み取り、動きを再現する以上、候補生に必要なのは運動能力である。

瞬発力も持久力もどちらも欠かせない。

無駄に元気なのは、やはり飯田睦実いいたむつみだった。

暑苦しいくらい熱血、いいことである。

でも、無駄に揺れる胸部は邪魔だ、わるいことである。

研究室にはいると、天然助手がコーヒーを床にぶちまけていた。

いつものことなので、無視して椅子に座る。

酸っぱくてどろどろのコーヒーをだすくらいなら、自販機のもので十分なのに、古めかしいサイフォンを使っていつもいれてくれる。

残すと実に情けない顔を向けてくるので、ちびちびと飲むしかない。ここで一気に飲んだほうがましだと思うが、無駄に気を利かせておかわりをいれてくれるので、タイミングを計りながら飲んでいくしかない。

泥のような感触が口に広がる。

実に面倒くさい助手だ。

しかし、資料整理だけは上手く、机の上にはきれいに閉じられた資料がおいてある。

紙にプリントアウトせずとも、端末で見ればすむことだが、桜井は

レトロな方式を好む傾向にある。

ここ二週間、候補生たちにはロボの操作系の端末をいじってもらった。グラフの波線はそのシンク口率を示している。

でうちあげで「多感な若者ほど大きく作用するシステム」といったが、すべてが嘘というわけではない。

脳波というのはひとつによってまちまちであり、より反応の大きいものほど操作が円滑に行われる。

パイロットの資質としてあげるなら、身体能力とともに操作系との相性も含まれる。

しかし、これはある意味諸刃の剣で、相性のよいものほどパニック状態になると取り返しがつかないこともおこりかねない。

なので、そのバランスを考えて誰がもっともふさわしいパイロットであるか決める必要がある。

もっとも、それはシステムに恒常性を持たせることによって、あらかじめ防げる仕様になっているが。

あるページで、桜井は指をとめる。眉間にしわをよせる。

「おかしいなあ」

「なにがです？」

「いや、聞いてないから」

頬を膨らませて怒るには少々痛い年齢の助手を無視する。片手に持ったコーヒーマグは、桜井のマグが空になるのを待っている。

飯田の資料だ。グラフの波線は、それほど大きな波をうっていない。平均のそれ以下だ。
ゆえに、シンクロ率も低い。

あれだけ、無駄に元気に端末をいじっていたのに。

いじるといっても、操作系端末のついたゴーグルを使い、動きをイメージするだけである。イメージは仮想空間内のアバターに反映される。その動きの誤差が、反応の大きさの違いと比例する訳だ。

桜井の買い物も、アバターを使ったものだ。ほとんど、現実の買い物と変わらない代物だ。

飯田ならば、他の候補生に比べて反応速度がはやいと予想していたのに。

どういふことだ。

男女の性差を視野にいれても、反応は悪いとさえいえる。

桜井は、首をかしげたまま、泥のようなコーヒーをすすった。

「おい、おまえか」

スナック菓子をほおばりながら、澤田さわだが話しかけてくる。

「なんのことだ」

桜井は、メンソールをふかしながら答える。

有害物資のまったく含まれなくなった煙草は、それでも分煙の義務がかせられる。ガラス張りの喫煙室のベンチにけだるげに座っていた。

「あれだよ、あれ」

太い指のさす方向には、ランニングを終えた候補生たちがいる。その中に紅一点の飯田がいるのだが。

「なんで平べったいんだよ」

無駄な脂肪がついていた飯田の胸部が、とてもすっきりしていた。かわりに腹回りがかっしりしたように思える。

「ああ。強化ギブスだ」

「はあ？」

飯田は実に真面目で素直な熱血馬鹿である。性差を補うために、訓練は他人の倍しなければならぬと言ひ含め、重石の入ったベストを渡した。

実際は、胸部をおさえこむ特殊なベストである。胸の大きさを考慮すると、すべて押さえこむことはできず、かわりに腹部を太くすることでごまかした。そこに、重りをいれるように特注した。

わざわざ女性型アバターまで作って買ってきた代物だ。いかに、ラ

インを隠して見せるか、試着に三時間もかけたのだ。
ネカマをやっている最中に、里中さとなかがやってこないかどきどきしたものである。

「揺れて邪魔だと思ったからな」

「おまえはー」

澤田がこぶしを震わせる。実は、こいつも、とある特殊趣味の店で某パイロットの着るタイトなスーツを注文していたりしていた。

どんな言葉で着せようと考えていたか知らないが、おそらく澤田もネカマをやって試着していたりしていたのかもしれない。

いい気味だ。

ヒーローはスーツなど着なくとも、赤いマフラーさえつけていればよい。スカーフでも可。学ランなら着ても悪くない。

平べったい体型の飯田にはよく似合うことだろう。

それにしても。

もう一度、脳波を調べてみる必要があるかな。

メンソールを灰皿につぶしいれると、飯田はぼさぼさの頭をかいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3227z/>

ロボット製作者の誤算

2011年12月13日01時58分発行